

《特集》フェアトレードを通じた小規模農家の支援 ——ミッションの追求とビジネスとの狭間で——

箕 曲 在 弘

Supporting the Small-scale Farmers through Fairtrade: On Standing between Mission-driven Trade and Business-driven Trade

MINOO Arihiro

本特集は、2014年11月8日に開催された白山人類学研究会・第7回研究フォーラム「オルタナティブな交易を通じた小規模農家／生産者の支援——当事者の視点からみる交易の意義——」（白山人類学研究会・オルタナティブ・トレード研究会¹⁾）における報告がもとになっている（付記参照）。

今日、「フェアトレード」という概念は、日本においても浸透しつつある。フェアトレードは、国際貿易に依存する小規模な生産者が被る経済的な不利益に対し、貿易における利益分配の不均衡を是正する運動として、1980年代の後半より世界各地に広まっていった。もともとその源流は、第二次世界大戦以降、欧米のいくつかのNGOによって行われていた、発展途上国の生産者から直接、製品を買い取る実践にあったとされる。オルタナティブ・トレードと呼ばれていたその実践が、次第にネットワーク化され、大きなうねりとなり、われわれの知る「フェアトレード」という概念のもとにまとめられるようになった[Raynolds and Long 2007: 15-16]。

こうしたフェアトレードが世界各地で広まりつつある背景には、自由市場経済が推し進める金融市場における投機や、巨大企業による寡占的な貿易条件の支配といった問題があるとされる[Murray and Raynolds 2007: 6]。この状況において疎外されるのは、立場の弱い生産者や労働者たちである。発展途上国の農場で一次産品の栽培に従事する小規模生産者は、市場への参入もままならず、知識や技術もないために生産物に付加価値がつけられない環境におかれている。おまけに、ニューヨークやロンドンの先物取引市場で決まる取引価格に依存した売買を行わざるを得ない状況にさらされている。一方、発展途上国の縫製品工場で働く労働者は、厳しい労働条件にさらされ、低い賃金で働かされているという。さらには児童労働まで行われていると言われる[ニコルズ・オパール 2009: 48]。

このようなフェアトレードと呼ばれる多様な実践は、南北格差や貧困問題に関心のある多く

1) 同研究会は、科学研究費補助金海外研究（2014～2015年度）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（代表：池上甲一）により研究活動を行っている。

の市民や研究者の関心を引き付けてきた。その理由は、開発援助や国際協力といった文脈ばかりでなく、反グローバル化運動の一つとして世界的に広がる社会運動／市民運動の文脈でも捉えることができるといった間口の広さにある。開発援助や国際協力の観点からは、貧困削減にビジネスの要素を取り込むという点で新たな現象だとみなされている。一方、社会運動や市民運動の観点からは、自由市場経済のグローバル化がもたらす負の側面（経済格差や環境問題）を乗り越える具体的な方策として期待されている。

とはいえ、フェアトレードが研究者を引き付ける理由は、こうした間口の広さにあるだけではない。フェアトレードは、「援助とビジネス²⁾」あるいは「運動とビジネス」といった両極の狭間に位置づけられる、「居心地の悪い」現象だからである。フェアトレードの特質は、単なる援助や社会運動という枠組の中に収まらず、それらとは別の論理で動くビジネス的な側面も含みこむことによって成立している。この両者の間にある「居心地の悪さ」が現象としての魅力であるとともに、活動を行ううえでの困難の源泉でもある。

これまでに数々の研究者が、こうした「居心地の悪い」フェアトレードという現象を学術的な観点から批評してきた。たとえば、ギャビン・フライデル（Gavin Fridell）はラウル・プレビッシュやイマニュエル・ウォーラーステインに至る従属理論を [Fridell 2007]、またダニエル・ジャフェー（Daniel Jaffee）は、カール・ポランニーの社会に埋め込まれた経済の議論を援用し [Jaffee 2007]、今日のフェアトレードが抱える課題と向かうべき方向性について論じている。これらの研究はフェアトレードの運動をより広い思想的文脈の中に位置づける作業として意義をもつ一方、今日では、農業経済学や文化人類学、人文地理学を中心に、フェアトレードが生産者や労働者の現場に及ぼす影響を検討するインパクト研究もさかんに行われるようになった。

公正な貿易条件を設定することによって貧困削減を目指すフェアトレードの思想や制度は、現地の生産者や労働者の生活状況のなかに、どのように入り込み、その状況にどのように作用するのか。あるいは、従来からある取引環境に対してどのように作用するのか。こういった問いは、生産者や労働者の置かれた歴史的、社会的状況にしっかりと目配せをしながら、フィールドワークをすることによって答えていく必要がある。

たとえば、先述のジャフェーは、コーヒーの市場価格が低迷していた 2003 年に、メキシコのコーヒー生産者に対して家計調査を行い、フェアトレード参加者と非参加者の家計状況の違いを明らかにしている [Jaffee 2007]。当時は、コーヒー価格の低迷期にあり、フェアトレード生産者は一般市場価格の 3 倍程度の収入を得ていたが、除草剤が使えず、人の手で除草する

2) ビジネスという表現は、事業や仕事、業務など多義的な概念であり、見方によっては NGO の活動もビジネスだと言えなくもない。だが、ここではビジネスを金銭的な利益を優先して追求する行為と意味を限定して使うこととする。

ことにより雇用労働者への支払賃金の総額も上昇したことが指摘されている。

一方、サラ・ライオン (Sarah Lyon) は、グアテマラのコーヒー生産者に対する10年に及ぶ断続的な参与観察の結果、フェアトレードの社会的側面へのインパクトに対する重要な指摘をしている [Lyon 2012]。ライオンは、長年にわたって先進国の焙煎業者と生産者団体が交流することにより、生産者たちが消費者の存在を意識するようになり、生産者と消費者の間に「想像の共同体」が構築されたり、団体側が輸出許可証を取得するなど実利的な恩恵をえたりしていることを指摘している。その一方で、団体の幹部が先進国の輸入業者との取引に精通することにより、一般の生産者との間に溝ができるといった問題も指摘している。

これらのフェアトレード・インパクト研究は、世界中のさまざまな生産者や労働者を対象に行われている³⁾。だが、これらの諸研究を比較し、どういう条件が整えばフェアトレードは持続可能な取り組みとなるのかということまでは検討されていない。確かに、ルアード・ルーベンらは中南米諸国やサブサハラ諸国のバナナ、コーヒー、ハーブなどさまざまな商品の生産者に対する調査を実施し、フェアトレードの影響に対する広範な研究を行っている [Ruben et al. 2008]。だが、ルーベンらの研究では、生産者や労働者が生活する社会的な文脈への配慮が幾分欠けている。フェアトレードの思想や実践が、現地の生産者や労働者の生活する社会的文脈の何に作用し、どのような変化をもたらすのかは、現地に滞在しながら調査者が発見し、掘り起こしていくしかない。したがって、あらかじめ調査の枠組みを決めて、データを収集していく方法では、現地の文脈から切り離してフェアトレードのインパクトを評価することになりかねない。

そこで、本特集では、フェアトレードにかかわる小規模農業を営む人びとに限定して、各々の調査地である農村の現場において、フェアトレードに関連する諸活動がどのように実践され、どのようなインパクトを与えているのかを、各々の論者の関心に従って自由に論じてもらっている。このため、各論稿の方向性は統一されていないものの、各論者がフェアトレードのインパクトを検討するうえで重要だと考える要素を現場のなかから発見することに力点が置かれている。その意味では、本特集に収録された諸論稿は、フェアトレードの現場のリアリティを伝え、現場に入らなくては知ることのできない意外な事実や論点を提起しているといえる。

取り上げている事例は、南アフリカのルイボス茶農家、ラオスのコーヒー農家、タイのジャ

3) フェアトレードの生産者を対象としたインパクト研究は、近年、さまざまな生産者団体を対象にいくつも行われている [Ikegami, Aungsumalin and Tsuruta 2014; Kodama 2010; Lyon and Moberg 2011; Makita 2011; 2012a; 2012b; 2014; Minoo 2014; Moberg 2013; 2014; Tsuruta and Chanachai 2014a; 2014b]。さらに詳しく知りたい場合は、フェアトレード・インスティテュート (Fair Trade Institute) の文献リスト (<http://www.fairtrade-institute.org/index.php> [検索日 2015年5月3日]) や『アジア研究所図書館所蔵 フェアトレード関連図書・雑誌記事・論文リスト』 (http://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Region/Intl/pdf/2012_fair_trade_bibli.pdf [検索日 2015年5月3日]) を参照されたい。日本語で読めるものとしては、[池上 2012; 児玉 2007; 小松 2011; 辻村 2009; 2012; 鈴木 2011; 鶴田 2012; 箕曲 2014; 吉田 2011] などがある。

スミンライス農家、フィリピンのバナナ農家の4つである。どの事例においても、農家のみに焦点を当てるのではなく、農家を支援する組織と農家との関係に焦点を当てている。

まず、南アフリカ共和国のアイベルト協同組合を事例に、ルイボス茶農家に対するフェアトレードの影響について考察した池上甲一の論文では、フェアトレードからの「自立」が論点になっている。池上は家計調査に基づきフェアトレードの金銭的なインパクトばかりでなく、価値観や社会システムの変化といった間接的なインパクトまで網羅的に明らかにしたうえで、生産者組織とその組織を支援する NGO との関係に注目する。池上はアイベルト協同組合の組合員は白人農場にあまり依存しないで済むようになり、組織運営における能力開発にも一定の効果がみられたとフェアトレードの効果を指摘する一方、現地の組合員からは NGO による支援から自立していこうとする志向が生まれているという。池上は、こうした自立志向は組合員たちがエンパワーされた結果であり、白人支配の構造への依存が強い小農民にとってその意義は大きいと肯定的に捉える。

次に、ラオスのコーヒー生産地におけるフェア概念の多様性について考察した箕曲在弘の論文では、FLO が想定するフェア概念とは異なるいくつかの買取団体によるフェア概念が、ラオスのコーヒー生産地において競合している様相を捉えている。ラオスのコーヒー生産地では、2つの協同組合が併存し、一方では FLO 認証による買い取り、他方では生産者と直接交渉する買い取りが行われている。とくに後者では、直接買い取りの結果、現地の生産者団体の幹部が、現地の生活状況に即したフェアの条件をつくり出してきたことが指摘される。この事例から箕曲は、フェアトレードのインパクトを理解するうえで、FLO によるフェアと現地のフェアとの関係だけでなく、多様なフェア概念の協調と競合の関係に注目し、その中から現場の人びとのフェア概念の生成と変容のあり様を理解することが重要であると結論付ける。

さらに、鶴田格の研究ノートでは、タイにおけるフェアトレードや有機農業運動と仏教思想・仏教実践とのかかわりについて論じている。鶴田は開発僧によって実践されるオルタナティブな開発の源流を辿り、この開発実践やその実践の背後にある仏教思想の中に、フェアトレードや有機農業運動がどのように位置づけられてきたかを、スリン県とヤソトン県の事例をもとに跡づける。この過程で明らかになるのは、開発僧が地域の文脈に根差した貧困問題の解決に取り組むなかで、開発僧は仏教思想によって人びとをまとめ、「コメ組合」や「道徳米」プロジェクトとして結実していった点である。この事実から、タイにおけるコメのフェアトレードが決して外来の思想の押し付けによって始まったのではなく、地域に内在する課題を解決していこうとする内発的な取り組みのなかにフェアトレードが取り入れられることで始まったことが読み取れる。

最後に、市橋秀夫の研究ノートでは、鶴見良行の『バナナと日本人』の刊行から 30 年以上が経った今日におけるフィリピンの小規模バナナ農家の実態を報告している。市橋は多国籍企

業に支配されるフィリピンのバナナ産業が抱える問題に取り組み、国際的な産直運動を展開するオルター・トレード・ジャパン (ATJ) の「自立」論の再検討を目的に、断続的な現地調査を実施してきた。その結果、市橋は、ATJが「自立」をこれまでのように一元的に捉えるのではなく、仕事をもつこと、親元を離れること、結婚することなどを複合的に捉えることにより、さまざまな段階の自立を目指す戦略をもつべきだと主張する。同時に、現地の物価上昇率やライバルとなる仲買人の買取価格の上昇といった要素を顧みず、バナナの買取価格が据え置きされている現状に再考を迫る。

先述したとおり、本特集に収録された4つの論稿は、各論者の関心に従って自由に執筆されたものである。だが、こうしてまとめてみると、大きく3つの論点が提示されたと言える。第一に、フェアトレードからの自立に関する論点である。池上論文ではNGOによる支援が成功しているがゆえに、現地の生産者によってNGOからの脱却が提起されていた。一方、市橋論文ではバナナ生産者を支援する団体が掲げる「自立」の目標が、取引開始から25年を経て現実的なものではなくなってきたことが強調されている。どちらもフェアトレード(市橋論文の場合は、民衆交易)の取り組みのなかに、生産者の自立をどう位置付けるかが課題となっている。こういった議論は、これまで正面からなされたことはなかったといえる。だが、池上も述べるように、フェアトレードが生産者団体との対等なパートナーシップを目指すのであれば、フェアトレード市場への依存から脱する道筋を検討することが重要になる。

第二に、フェアトレードの理念と生産者の住む世界における社会思想との関係に関する論点である。鶴田論文ではタイ語でフェアトレードに相当する概念がカーンカー・ティー・ペンタムにあたり、なかでもペンタムが仏教的な背景をもつ概念であることが指摘されている。タイの隣国ラオスでも、フェアトレードはタイとほぼ同じくカーンカー・ペンタムと表現され、両者には共通性がある。もともと、箕曲論文では、仏教思想に着目するのではなく、農家の人びとの日常的なペンタムの使い方に着目している。とはいえ、鶴田論文と同様に、生産者の社会的な文脈の中に、外からフェアトレードの実践がどのように取り込まれていくのかが論点となっている。このように現地側のフェアに相当する概念とそれにもとづいた実践に注目した議論は、管見のところほとんどなく、本特集において新たな分析視角を提示できたと言える。

第三に、フェアトレードのミッションに根ざした論理とビジネスに根ざした論理の両立の難しさが明らかになった。ここでいうミッションとは、白人依存の経済からの脱却(池上論文)、農民自身による自立した協同組合の構築(箕曲論文)、タンマに基づいた経済(鶴田論文)、生産者の「自立」(市橋論文)といった、自由市場経済から袂を分かた論理の総体を指す。本特集の4つの論稿を通覧すれば、すべてこのようなミッションと自由市場経済との緊張関係が議論の基底をなしていることに気づく。池上論文では、白人依存の経済からの脱却を目指したNGOの支援が、逆に生産者をNGOに依存させることにも寄与している様子が描かれている。箕曲

論文では、農民によって自立した協同組合を構築するための支援をする論理と品質がそのまま金銭的評価につながるスペシャリティコーヒー市場の論理とが拮抗していく様子が描かれている。鶴田論文の背景をなすのは、社会運動を支えていた仏教的価値観が後景に退き、ビジネスの側面が前面に出ていく事態であった。市橋論文では、支援者側の「自立」論が現場におけるバナナの取引と乖離している様子が描かれている。

この「ミッション」と「ビジネス」という2つのベクトルは、フェアトレードに本質的に内在する要素である。本特集を通じて分かるのは、取引という多様な利害が結節する場面では、特定の理念を関連するステークホルダー全体に共有し続けることの難しさだといえる。このように見てくると、フェアトレードのインパクトを研究するには、ひとまずフェアトレードが実践されている現場において、その実践を文脈化し、多様な関係性のなかに位置づけることが必要とされていることが分かる。いずれにせよ、これらの3つの論点については、いまだ論点を提起したにとどまり、正面から論じることまではできていない。それはこれからの課題となる。本特集を通じて、フェアトレードのインパクトを検討する際、じつに多様な側面に目を向ける必要があることが伝われば幸いである。

付 記

前述のフォーラムでは、以下の報告がなされた（敬称略）。

箕曲在弘 「ラオスにおけるコーヒー生産者協同組合に対する支援のゆくえ」

鈴木紀 「ベリーズのカカオ産業——フェアトレードと歩んだ20年」

池上甲一 「フェアトレードと小規模生産者の「自立」——南アフリカのルイボス茶生産者組合とNGOとの関係を中心に」

市橋秀夫 「零細小農民にとっての自立論再考——フィリピン・ネグロス島における「民衆交易」バナナ生産者の事例をもとに」

また、大野敦氏（立命館大学経済学部准教授）が箕曲報告と鈴木報告に対して、鈴木紀氏（国立民族学博物館准教授）が池上報告と市橋報告に対してコメントした。

参 考 文 献

[英語文献]

Ikegami, Koichi, Saroj Aungsumalin and Tadasu Tsuruta (eds.)

2014 *Poverty Alleviation and Rural Development through Alternative Socio-economic Regimes: Fair Trade Movement and Economy of Virtue*, Bangkok: Faculty of Agriculture, Kinki University and Faculty of Economics, Kasetsart University.

Kodama, Yuka

- 2010 The Effects of Fair Trade on Coffee Producers: A Case Study of Ethiopian Coffee Cooperatives, In *Proceedings of the 16th International Conference of Ethiopian Studies*, edited by Ege, Svein, Harald Aspen, Birhanu Teferra and Shiferaw Bekele, pp. 779-792, Trondheim: Department of Social Anthropology, Norwegian University of Science and Technology.

Lyon, Sarah and Mark Moberg (eds.)

- 2010 *Fair Trade and Social Justice: Global Ethnographies*. New York: New York University Press.

Makita, Rie

- 2011 A confluence of Fair Trade and organic agriculture in southern India, *Development in Practice* 21(2): 205-217.
- 2012a Fair Trade and organic initiatives confronted with Bt cotton in Andhra Pradesh, India: A paradox, *Geoforum* 43(6): 1232-1241.
- 2012b Fair Trade certification from the perspective of tea plantation workers in India, *Development Policy Review* 30(1): 87-107.
- 2014 Poverty reduction and environmental conservation through Fair Trade, In *Asian Rural Sociology V "From Challenges to a Prosperous Future in Rural Asia"*, edited by Ikegami, Koichi et al., pp. 149-157, Vientiane: National University of Laos.

Minoo, Arihiro

- 2014 The Anthropological Study of Fairtrade: A case study of coffee farmers in Lao PDR, In *Asian Rural Sociology V "From Challenges to a Prosperous Future in Rural Asia"*, edited by Ikegami, Koichi et al., pp. 143-148, Vientiane: National University of Laos.

Moberg, Mark

- 2014 Certification and Neoliberal Governance: Moral Economies of Fair Trade in the Eastern Caribbean, *American Anthropologist* 116 (1): 1-16.

Murray, Douglas L. and Laura T. Reynolds

- 2007 Globalization and its antinomies: Negotiating a Fair Trade movement, In *Fair trade: the Challenges of transforming globalization*, edited by Reynolds, Laura T., Douglas L. Murray, and John Wilkinson, pp. 3-14, New York: Routledge.

Reynolds, Laura T. and Michael A. Long

- 2007 Fair/Alternative Trade: Historical and empirical dimensions, In *Fair trade: the*

Challenges of transforming globalization, edited by Reynolds, Laura T., Douglas L. Murray and John Wilkinson, pp.15-32, New York: Routledge.

Ruben, Ruerd (ed.)

2008 *The impact of Fair Trade*, Wageningen: Academic Publishers.

Tsuruta, Tadasu and Suriya Chanachai

2014a Fair Trade of Organic Jasmine Rice in Surin Province, Northeast Thailand: Background and Analysis of its Development Process, In *Poverty Alleviation and Rural Development through Alternative Socio-economic Regimes*, edited by Ikegami, Koichi et. al., Bangkok: Kasetsart University.

2014b A Paradox in Fair Trade of Organic Jasmine Rice in Yasothon Province of Northeast Thailand: Business or Social Movement?, 『農業・食料経済研究』60-2: 1-9.

〔日本語文献〕

池上甲一

2012 「アフリカ小農社会におけるモラルエコノミーの変容：農業開発事業とフェアトレードによる影響」『農林業問題研究』48(2): 303-307.

児玉由佳

2007 「エチオピアのコーヒー生産者とフェアトレードーコーヒー協同組合の事例からー」『グローバル化と途上国の小農』重富真一（編）, 21-51 ページ, 東京: アジア経済研究所.

小松豊明

2011 「社会開発 NGO にとってのフェアトレード」『フェアトレードを学ぶ人のために』, 佐藤寛（編）, 167-192 ページ, 京都: 世界思想社.

辻村英之

2009 『おいしいコーヒーの経済論』, 太田出版.

2012 「キリマンジャロの農家経済経営とフェアトレード：利益最大化と家計安全保障」『農林業問題研究』48 (2): 326-312.

鈴木紀

2011 「フェアトレード・チョコレートと持続可能な開発」『フェアトレードを学ぶ人のために』佐藤寛（編）, 144-164 ページ, 京都: 世界思想社.

鶴田格

2012 「フェア・トレード商品の生産農家の多様性に関する一試論」『農林業問題研究』

48(2): 332-337.

ニコルズ, アレックス/シャーロット・オパール (編著)

2009 『フェアトレード——倫理的な消費が経済を変える』東京: 岩波書店.

箕曲在弘

2014 『フェアトレードの人類学』東京: めこん.

吉田栄一

2011 「紅茶産業のフェアトレード参入と地域社会支援」『フェアトレードを学ぶ人のために』佐藤寛 (編), 193-220 ページ, 京都: 世界思想社.